

## 詩編 第88編 1節

「主、私の救いの神。私は昼は、叫び、夜は、あなたの御前にいます。」

多くの場合呼びかけは、主よ、となっている。しかし、ここでは初めに、主、だけが放たれている。あまりの惨めさ、辛さで、主よ、とさえ呼べない状態であったかもしれません。とにかく、主、とだけ放つ。そして、どれだけの間を置いたのか、今度は、私の救いの神、と言う。主、と叫んだ直後かもしれない。長い間を置いての叫びかもしれない。御名を呼ぶのではなく、叫ばざるを得ない困窮にある。

私は、いまこうです。御名を呼べず、ただ叫んでいます。昼は叫んでいます。悲惨を目の当たりにしています。どうしようもない世の悲惨の前で呻き、叫ぶしかありません。あなたに叫びます。何も変わりません。どうすればよいのでしょうかと昼に叫ぶだけです。

そして、夜が来ます。昼に世の悲惨を見てきました。暗くなり、見えなくなりました。それでも、私の目には刷り込まれています。私のところには止むことのない叫びがあります。変わらない悲惨な世に痛む、呻くところは疲れ果てています。疲れ切った私は、夜は、あなたの御前に崩れ落ちるしかありません。主、私の救いの神。私は続けます。昼は、叫び、夜は御前に崩れ憩います。夢でも主、と叫びます。

2023年1月18日